

座間味村史

上 卷

1989

目次 (上巻)

カラー口絵／発刊のことば／発刊を祝す／凡例

〈各巻ごとの章立ては各巻末尾参照〉

序 説

序 説 座間味村の概観 3

第一編 自然

第一章 地形と地質

第一節 座間味島 20

第二節 阿嘉島 24

第三節 慶留間島 26

第四節 屋嘉比島 28

第五節 久場島 30

第二章 海洋

第一節 海潮流 33

第二節 慶良間内海 36

第三節 沖繩海岸海中公園地区……………41

第三章 気象

第一節 気象観測所……………43

第二節 気象の概況……………43

第四章 植 物

第一節 座間味村の自生・栽培植物……………49

第二節 老樹名木……………68

第五章 動 物

第一節 ケラマジカ……………69

第二節 その他の天然記念物……………78

第三節 動物の方言……………80

第二編 歴 史

第一章 先史時代

第一節 先史時代の概要……………93

第二節 村内遺跡の概要……………101

第三節	座間味平野の自然環境	124
第四節	集落の形成	127
第二章	琉球王国時代	
第一節	史書にみる座間味	135
第二節	近世の税制と役人	147
第三節	慶良間人の海洋活躍	165
第四節	流人の島	188
第五節	飛船乗りの活躍	195
第三章	明治・大正期	
第一節	琉球藩設置と座間味	203
第二節	廃藩置県	213
第三節	「旧慣」温存期の座間味	220
第四節	新しい時代の波	235
第五節	「近代化」への移行	249
第六節	大正期の村民生活	264
第四章	昭和戦前期	
第一節	突然の不況の波	279

第二節	不況からの脱出	286
第三節	南洋出稼ぎと住民生活	301
第四節	戦争への道	310

第五章 戦場下の座間味村

第一節	戦争のあしおと	331
第二節	戦火に吞まれた住民たち	341
第三節	「集団自決」事件	349

第六章 慶良間列島制施行

第一節	米軍に収容される	371
第二節	慶良間列島制施行	381
第三節	戦後の復興	386
第四節	土地所有権の調査	399

第七章 戦後のあゆみ

403

第三編 産業

第一章 水産業

2. 戦火に呑まれた住民たち

第二節 戦火に呑まれた住民たち

1 不穏のなかの軍作業

十一月も半ば頃、阿嘉に日本軍の船舶兵一〇〇人あまりが上陸したため、兵隊たちが三個中隊に編成され、慶留間のアカムテイの第一中隊、真謝の海岸の第二中隊、そして西浜の第三中隊として配置された。

またちようどその頃、座間味島と阿嘉島にそれぞれ七人ずつの「朝鮮人慰安婦」が送られ、彼女たちの宿泊先および「仕事場」として、阿真の島村渠とカニタ、それに、阿嘉のユナンミ小とアガイミーヤが割り当てられた。家族は屋敷の離れに追い出されたわけである。彼女たちは、当時日本の植民地であった朝鮮の若い娘たちで、女子挺身隊の名でいわばだまされたかたちで日本に連行され、日本兵の性的相手をさせられた人たちであった。座間味村では「朝鮮ピー」とか「ピーヤ」と呼ばれ、住民たちとの交流は全くといっていいほどなかった。

この時期に、軍の船舶隊による爆雷の投下演習が行われ、住民たちはそのときはじめて待幹隊の役割の内容がわかったという。時速一七、八ノットで二個同時に投下された爆雷の威力があまりにもすさまじく、住民たちはただ茫然と成り行きを見守っていた。海面にはおびただしい数の魚が浮き上がり、その晩の食卓をにぎわしたが、人間がこの爆雷を抱えて敵艦に体当たりすることを考えると、久しぶりに腹が満たされたにせよ、住民たちの胸中は複雑であった。

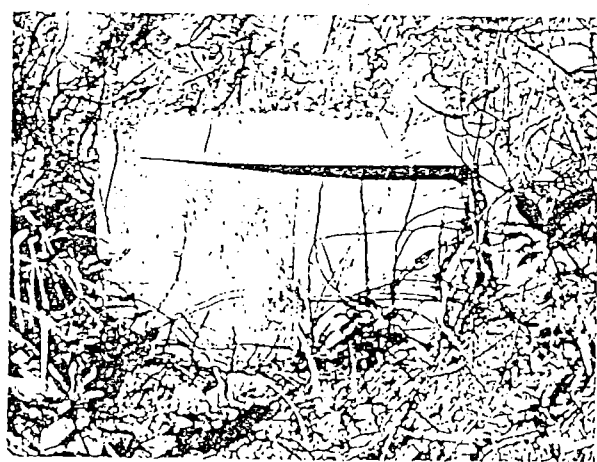
また阿嘉では、十二月月上旬になつて満十五歳から十七歳までの男子が戦闘教練のために集められ、下士官や将校の指導で匍匐前進や射撃訓練などをさせられている。こうした若者たちの戦闘協力態勢に、住民たちは、確実に戦争が近づいていることを肌で感じとらざるを得なかった。しかも、住民たちが耳にする情報は、マリアナ沖海戦の敗北以来、サイパンの陥落、ビルマの日本軍の全滅等、信じられない日本軍の苦戦の模様であった。

一九四五年(昭和二〇)一月三日、日本軍の上陸以来、陣地構築と漁労班に従事していた座間味島の十六歳から

四五歳までの男性たちが防衛隊として再編成され、女子青年の約二〇人が軍の炊事班、将校集会所、経理室などに配属された。とくに女子は軍属（軍人ではなく、軍に所属する民間人）として、左腕のそでの部分に赤の星のマークのワツペンを付けるよう義務づけられた。そして婦人会の方は、いつものように白二〇個ほどを並べて玄米つきを、国民学校高等科生と青年団の一部がマチャンの開墾で食糧増産を日課とするようになっていた。

そんななかで、一月二二日に、十・十空襲以来の二回目空襲を受け、前回の空襲でやられたのをかろうじて修理して使用していた船舶のすべてが水中に没したため、沖縄本島からの食糧補給は全く不可能となってしまった。したがって、食糧増産の作業がますます強化されるとともに、次第に全住民が国家防衛という大義名分で強制的に軍に協力させられ、それこそ「尽忠報国」「堅忍持久」「一億一心」の名の下に集結されていったのである。

住民たちは不穏な空気のなかで、言葉にこそしないが、新年から慌ただしく動きだしている昭和二〇年が「特別」の年となることを直感していた。その気持ちをより不安



「御真影」避難壕（ウンナガーラ）

にさせたのが、一月下旬の「御真影」の疎開であった。戦況の悪化によって、県当局では沖縄本島中南部の「御真影」の移転保護を検討していたが、各学枝にある「御真影」を、ヤンバルの大湿帯（現名護市源河）の沖縄県有林事務所に疎開させるよう通達してきたのである。座間味村では万一のためにと、ウンナガーラ上流近くに「御真影」避難用の壕を掘っていたが、この通達によって沖縄本島に移されていった。明治以来、住民たちにとって「神様」としてあがめてきた天皇・皇后の写真が移転されるといふことは、自分たちの土地が危険にさらされていることをいやでも知らされることになった。なかに

2. 戦火に吞まれた住民たち

は「君が代」を歌って見送りながら、すでに負け戦を感じ取った人もいたようだが、当時の時勢下では本心を吐露できるはずがなく、心の支柱を失いながらも諦めるより他はなかった。

2 中学生にも戦闘教練

二月も中旬にさしかかった頃、沖繩守備の日本陸軍部隊・第三十二軍の戦闘指針として、「一機一艦船、一艇一船、一人十殺一戦車」というキャッチフレーズが軍民に示達された。文字通り一つの飛行機で一つの艦船を、一つの舟艇で軍用船を、一人で十人の敵を殺し、戦車一つをつぶせという意味あいのものである。そして、中南部の住民は全員国頭へ疎開するよう命令が出され、戦雲がすぐ近くまで来ていることが軍の行動によつてはつきり示された。

ちょうどその頃、座間味、阿嘉、それに慶留間にいた基地大隊の主力部隊一、三〇〇人ほどが沖繩本島に移動して行き、代わりに朝鮮からの徴用軍夫が座間味に約三

〇〇人、阿嘉に約三五〇人が配置され、なかでも阿嘉のメンバーから三〇人は一中隊として慶留間のアカムティに配置された。この基地大隊の移動に伴って、屋嘉比島で働いていた本土人や村外出身者の一部は、ただならぬ島の雰囲気と身の危険を感じて、軍の船に便乗し、また阿嘉に配置されていた朝鮮人の「従軍慰安婦」七人も軍とともに島を離れていった。沖繩本島では女性や子供たちが安全な場を求めて疎開したり、村内でも危険を感じて島外出身者が島を出ていくのに対して、座間味村民は逃げ場がなくなますます危険な戦場に閉じ込められることになるのである。

戦争の足音を聞くまでは、「鯉儲け」とか「南洋儲け」とまで言われて飢えをしらなかつた座間味村民にとつて、こうした状況を迎えるということがいかに国家の危機を意味しているか、敏感に感じとらざるを得なかつた。しかも、それまで出征して行く兵士たちを送るために大太鼓を叩き、勇ましく歌を歌って部落の前の浜から派手に送り出したものが、二〇年に入ってから日は暮れてから、さらに浜ではなくハタキジー（座間味部落東海岸は

ずれ)から静かに送り出したということも、一層不安をかきたてたのであった。相手の顔も確認できない夕ぐれの中で、自分の息子や夫、兄弟の名を大声の限り呼び続け、船からもそれに応えるように肉親の名を呼び合うさまは、再び生きて会えるかどうかわからない、悲痛の思いを抱いた掛け声だったのである。

三月に入ってから、阿嘉、慶留間、屋嘉比の満十七歳以上四五歳までの男性たちが「防衛隊」として召集を受け、毎日竹槍訓練が続くようになった。そして前年の十二月に集められて戦闘教練に参加させられていた阿嘉の十五歳から十七歳までの少年たちが、「少年義勇隊」として組織化され、軍の雑役や監視哨、食糧運搬や弾薬運び、壕掘りが割り当てられた。

さらに慶留間からも、阿嘉の野田部隊へ防衛隊として七人が入隊したうえ、監視哨として成人一人に中学生七人が加えられて昼夜交代の勤務が命じられた。この中学生は、ほとんどが那覇で十・十空襲に遭い、命からがら島に帰ってきた若者たちであった。殊に慶留間島では兵隊が部落にいるわけではなく、アカムティに粗末な小屋

を作って駐屯している一中隊の兵隊たちが、夜遅くから食糧を求めてやってくるくらいで、実際の島の防衛は、中学生たちの腕にかかっているといっても過言ではなかった。したがって、慶留間の部落民は、万一のことがあった場合は、アカムティの一中隊の所へ行き、それから全員阿嘉へ逃げようという計画を立てていたようである。それだけ、戦争というのがどのようなものか、当時の住民たちが知っていたいようはずがなかったのである。

3 ねらわれた島々

一九四五年(昭和二〇)に入ってから空襲の頻度が高くなったものの、攻撃の対象がすべて船舶であったため、住民たちは戦争とはその程度のものだと高をくくっていた。十・十空襲を経験したことで、味噌、醤油などの保存食をはじめ、いざとなった時に荷物になりそうな道具はすべて各自の防空壕に運んでいたため、頻発する空襲にそうあわてる様子を見せることもなかった。とくに、国民学校高等科を卒業した十五歳以上の働ける男性たち

第六章 慶良間列島制施行

第一節 米軍に收容される

1 「捕虜」となった住民

座間味部落では、「集団自決」のタイミングを逃がしたり、あるいは年寄りたちに止められて死ねなかつた家族、さらに米軍につかまるのは恐くても死ぬことがもつと恐いと思つて壕にうづくまつていた家族等、生き残つた人たちは、米兵の「デテコイ、シンパイシユルナ」という呼びかけに壕を出ていった。そこには大勢の米兵たちが並んでいる。はじめて見る米兵に、驚きで一瞬めまいを覚えた人たちもいたようだが、不思議にそれ以上の恐

怖感はないでこなかつたという。

米兵について出ていった人たちは、全員村役場に連れて行かれた。役場の庁舎は、砲弾によつて一部壊れかかつてはいるものの、人間の数が少ないこともあつて、しばらくは住民たちの宿舎代わりにされた。

米兵たちはその後も、先に投降した住民を連れて各壕をまわり、投降を呼び掛けた。同時に、「集団自決」で倒れた人たちを全員外に引きずりだし、かすかながらも体温の残っている人はタンカに乗せて医務室に運んだ。住民を従えたのは、どの家族がどの壕にいるとわかることや、出るのをいやがる住民を説得させるためであつた。ところが、壕を飛び出して山中をさまよつていたり、裏

1. 米軍に收容される

海岸の自然壕に逃げて行った人たちはさがしうがなかった。

米軍は、座間味部落の残った家屋五軒を使用し、けが人の治療にあたるようになった。とりあえずウザシチを米軍本部にした後、ウフヤ小を朝鮮人軍夫の入院室、ウフヤは座間味の人たちの入院室、東イミヤが手術室、ワチレークが薬局、大翁長が朝鮮人である「従軍慰安婦」の入院室というように割り当てた。さらに渡嘉敷や阿波連部落からも「自決」未遂者が運ばれ、治療を受けるようになった。そして軽傷の人や回復した人たちはウカジン原に作った野戦病院でしばらく養生させたあと、住民の收容先に連れて行った。

座間味部落と古座間味は、沖縄本島攻略の重要な役割を果たす前進拠点として使用されるようになったため、戦前の原形すら留めないほどに変貌してしまっていた。ことに、島の一角に追い込まれた日本軍の一部の兵隊が、時々夜陰に乗じて斬り込みや散発的な襲撃をかけるため、米軍はそれに備えて部落の周辺に山裾やたんぼ、畦道等に地雷、その他の爆発物をしかけた。したがって、部落

内はとうてい人間が住める状態ではなく、いったん「捕虜」となった住民たちではあったが、移動せざるを得なくなっていた。

三月末か四月上旬頃、役場に收容されていた住民の阿真への移動がはじまった。阿真部落の家屋はほとんど被害がなく、一棟に数世帯の座間味部落民が入って共同生活をはじめた。この頃の阿真の住民は、まだ山中を逃げ廻っており、全くの他人が家族の留守の間に住み着いたかっこうになっていた。

米軍はいち早く役場や阿真の民家の石垣に「ニミッツ布告」を貼りだした。「ニミッツ布告」というのは、米軍が沖縄を占領した段階で、南西諸島やその近海の住民にあてた米海軍政府布告第一号「権限の停止」である。ニミッツとは、当時の米海軍元帥の名で、彼がこの布告を発したため、その名がつけられた。これによって、日本帝国政府のすべての権限が停止され、沖縄はアメリカ軍の支配下に入ることになるのである。

この布告に基づいて、慶良間列島の軍政担当の責任者には、カストロ少佐が就任した。そして、本来なら米軍

1. 米軍に収容される



座間味村役場前に貼り出されたニミッツ布告

と住民のパイプ役として村長、助役等役場職員があたらねばならないだろうが、座間味村の三役が自決してしまつており、代わりの人が必要であつた。そこで米軍から信望の厚かつた知念繁信（チニン）がその役割を担うことになり、収容所生活のスタートをきつたのである。

ところが、阿真に収容された村民は、全体の一部でしかなく、ほとんどの人たちが自分の壕を抜け出し山中奥深く、あるいは阿佐部落海岸裏のヌンルーガマ、トゥールーガマに潜んでいた。米軍が上陸したとはいえ、日本軍は必ず自分たちを助けにやってくると信じ、たとえ負けたにしても、アメリカ兵の捕虜にはなるまいと考えた人たちであつた。なかには老親や子供を引き連れ、米軍からの攻撃をかわしながらも食糧をさがし、家族を世話している婦人たちも大勢いた。彼女たちこそ、「大日本婦人会」の名の下で「捕虜」にはなれない人たちであつた。毎日死線をさまよいながらも逃げまわっている彼女たちからすれば、「捕虜」となつた村民は、日本人の恥さらしであり、売国奴でしかなかった。いまは負けているようでも、四月二九日の「天長節」に、必ず日本軍の反撃が

あると信じて待つていた。このことは、だれが言い出したことかは不明だが、住民たちにとってそう遠くない日であり、毎年日本の必勝祈願をしてきた日である。するものが全くなくなったこの時点で、「天長節」への期待は非常に大きかった。

とはいえ、どんなに頑張つてはみても、さすがに限界がきていた。日本軍は反撃に出るところか、住民のつくつた食糧をスキをつけて盗んでいくという状況で、彼らに戦いを期待することは所詮無理なことであつた。あるいはまた、沖縄本島あたりからの援軍を期待するにしても、米艦艇は隙間なく島を包囲し、小型舟艇がわがもの顔で海上を遊覧しているのだ。すっかり諦めきつた住民たちは、スピーカーからのよびかけに誘われるままに、四月二十九日のその日を境に、白旗を掲げて米軍の元へと降りていった。阿真のウフガーラを伝つて阿真部落に入ったものや、直接米軍の舟艇に拾われて阿真に連れていかれた人たちもいた。そして阿真の民家に、一軒七、八世帯ほどの割合で座間味、阿佐、阿真、それに屋嘉比島の鉾山の従業員の家族も合流したため、ひしめきあつた生活

が営まれるようになった。

また一方の慶留間部落では、座間味同様、生き残つた住民は保護されて、女がウスク下の家に、男が金網を張りめぐらしたカニクの屋敷に收容された。米軍上陸から二週間くらいでほとんどが部落に下りてきており、焼け残つた家屋に親戚同士で共同生活をはじめた。ところが、五月七日に伊江島住民四五〇名が連れてこられ、さらに、六月下旬には、阿嘉の住民三百人余りも收容されたため、慶留間部落は、本来の人口の十倍近くの人たちが集まつた。ただですら食糧難という状況だが、この時期の慶留間部落民にとって、伊江島、阿嘉住民がいることは、むしろ精神的な支えにすらなつていた。あの、あまりにも悲惨な肉親同士の「殺し合い」の後でもあり、にぎやかに生活をするこゝろで、ずいぶん気持ちが救われたものだった。

その頃の阿嘉住民の約八〇人は、まだ山の中になたてこもり、日本兵との「食糧戦争」を続けていた。

座間味村史

下 卷

1989

目次 (下巻)

カラー口絵／凡例

〈各巻ごとの章立ては各巻末尾参照〉

第七編 村民の戦争体験記

第一章 村内における戦争体験

九死に一生を得る……………	中村 春子……………	5
自決に追い込まれる……………	宮城 初枝……………	10
「泣く子は殺せ！」……………	宮里 米子……………	24
「集団自決」から生き残って……………	宮里 美恵子……………	31
飢えとの闘い……………	宮里 とめ……………	39
ノドが渴き小便を飲む……………	宮平 ヨシ子……………	50
目の前で首吊り……………	宮村 文子……………	56
肉親はみんな「集団自決」……………	宮里 育江……………	59
米軍と住民のパイプ役―戦時下の父・繁信を語る―……………	知念 繁夫……………	66
「死んではいけない」……………	宮平 貞子……………	75
「死」に見放されて……………	長田 一彦……………	79
いつの間にか「逃亡兵」……………	大村 真一……………	86

わが「不良少年時代」―終戦後の生活の思い出―	宮田 道夫	90
部落民が結束して避難	宮田 ハル	97
壕を転々と避難	平田 幸子	104
戦火をくぐりぬけた阿佐住民	与那嶺 清	108
自然壕に集まった人、人	高江洲敏子	112
自決未遂で顔は紫色に	中村八重子	117
首をくくり姉だけ死ぬ	中村武次郎	125
「敵」と化した日本軍	垣花 武栄	130
炊事班で軍と行動	宮平 ウメ	136
あこがれの軍隊―少年兵としての戦闘参加―	垣花 武一	144
阿嘉島を脱走	宮平 正春	152
最前線に出陣して	照喜名定盛	162
銅坑からの救出―屋嘉比島での戦争体験―	宮里 光禄	170
屋嘉比島からの生還	大山千代子	178
第二章 村外における戦争体験		
玉砕の島サイパンで	知念 春江	185
孤児院の院長となる―サイパンでの戦争体験―	松本 忠徳	199
満州にわたって	宮里 ヨシ	207

第八編 資料編

第一章 座間味村関係文献資料

〔総記〕	216
〔自然〕	223
〔考古〕	231
〔前近代〕	236
〔近代〕	291
〔産業〕	321
〔民俗〕	325
〔由来記類〕	351
〔村内資料（戦前）戦後）〕	369
〔村行政関係（戦後）〕	385
〔参考文献資料目録〕	438
第二章 座間味村関係新聞記事	
座間味村関係記事（戦前）	446
座間味村関係新聞記事収集目録一覽表	518

第三章 座間味村関係統計資料

『国勢調査』	524
『沖縄県史20』沖縄県統計集成（一九六七年、琉球政府）	525
『島尻郡誌』（一九三七年、島尻郡教育部会）	515
『島尻郡誌（続）』（一九七七年、財南部振興会）	516
『離島関係資料（昭和六一年度）』（沖縄県企画開発部地域振興課）	518
『沖縄民政要覧』（一九四六年、沖縄民政府総務部調査課）	551

第四章 座間味村関係略年譜

〈座間味村関係略年譜〉	556
-------------	-----

■コラム

約一五〇年前の座間味の屋号	287
甘サンデー、カーバタ	311
新聞と座間味村	517

編集を終えて／編集経過と本書の成り立ち／索引

〔座間味〕

がないですよ。縄を引っ張ったおじさんは自分も死ぬと
いって、何度か縄を首に巻きつけるんだけど、簡単には
死ねないんですね。二つの家族だけでも十何人が亡くなっ
たんです。

この生き残ったおじさんは、それから気遣いみたいにな
ってね、ほんとうにかわいそうでした。

私はここにいっても仕方ないので、家族を探すためにユ
ヒナの方に行きました。途中、男の人たちがサバニを盗
んで逃げようというもんだから、私もそのつもりでいた
んですが、サバニをなかなか海の方まで運べない。その
うち、私は家族に会いたくて探しに出かけたんですが、
途中、知っている人に家族の消息を聞いたら、「あんたの
家族はみんな死んでしまったよ」と言われたのです。そ
れを聞いて、私はいまにも倒れてしまうのではないかと
思ったほどでした。しかし、それから五分もたたないう
ちに、ほんとに偶然なんです、家族とバッタリ会った
のです。夢ではないかと思いました。

私たちはユヒナのトゥールーガマを最後に、四月二九
日、ちょうど天長節の日ですが、食糧も何もないため出

ていくことにしました。アメリカに阿真に連れて行か
れましたが、先に捕虜になった人たちはすっかり太って、
落ち着いた生活をしていました。私たちだけが、薄汚れ
た格好をしており、いつまでも抵抗して隠れていたこと
をばかばかしく思ったものでした。(談)

肉親はみんな「集団自決」

宮里 育江

(旧・宮平菊枝 当時二二歳)

家族と離れ、軍属へ

私は戦争前は郵便局に勤めていましたが、昭和二〇年
の一月頃から、軍属として安里美代子さんと二人徴用さ
れ、軍の経理室勤務を命じられていました。朝の八時か
ら夕方五時頃まで経理室(現在の郵便局の場所)に出
勤していたのです。

三月二三日の大空襲で私の家は焼けてしまい、その日から家族全員壕生活をする事になりました。家族は、母に弟、妹、祖父、叔母、そして私の六人で、私たちの壕は、弟とその友人がタカマタの本部と三中隊の中間あたりに掘っていましたので、そこに入ることにしました。ところが、この場所は戦場になる恐れがあり、危険だからと移動を命じられたのです。しかたなく私たちは、ウチガーのトグチ（当時の収入役所有）の壕に行くことになりました。

しかし、私は軍属だったものですから、軍属は住民とは別になりなさいということ、私と安里小の信子、妹の美代子さんの三人は軍と行動を共にすることになったのです。そのときの私たちは、赤い星のマークのワッペンを腕に付けていました。また、私の弟の恵達は役場に勤めていましたので、ずっと役場職員として勤務態勢にありましたが、家族は、弟が連れて避難してくれました。三人は、三中隊の壕にケガをした兵隊がいるから、その人たちの看護をするようにとの命令を受け、三中隊の壕に行きました。そこでは、足をケガした兵隊たちが数

人横たわっており、その中の長谷川少尉が動けないという事で、安里信子さんが看護婦だったこともあり、三人で面倒を見ることにしました。とはいえ、薬もなく、どうすることもできません。

三月二四日夕方、空襲がおさまってから三人とも、家族のもとに行ってみました。私の家族は、ソテツの入ったおかゆを食べているところでしたが、ちょうどその時、ムトウヌルチのつる姉さんが、産業組合の壕にお米の配給を取りにくるよう連絡にきたわけです。それを聞いて母は、身の危険を感じたのでしようか、「みんなユヒナのガマに行くと言っているけど、私たちはどうしようか」と言い出しました。私は「おじいさんもいるし、年寄りにこんな無理をさせなくてもいいのでは」と反対して、留まるよう説得しました。すると母が、「家族はみんな一緒の方がいいから、あなたもここにいなさい」というので、私もその気になったのですが、救急袋を三中隊の壕に置いてきていましたので、「それじゃ、救急袋を取ってくるね」と、私はタカマタの軍の壕へ戻っていったのです。

(座間味)

ところが戻りはしたものの、時間が遅いため家族のもとに引き返すわけにはいきません。その時、長田春子さん姉妹が、自分たちも仲間に入れてほしいと、三中隊の壕に入ってきたのですから、女性が五人になり、心強くなりました。その後、島は艦砲射撃に見舞われ、私たちは全く身動きできない状況に追いやられていました。

三月二五日のこと、伝令が、敵の艦隊が安室島に上陸したことを伝えてきたのです。そしていよいよ、特幹兵が出撃するということになりました。それで、「私たちも武装しますから、皆さんの洋服を貸してください。それを着ますので、一緒に連れて行って下さい」とせがんだのですが、「あなた方は民間人だし、足手まといになるから連れて行くわけにはいかない」と断られました。そして「これをあげるから、万一のことがあったら自決しなさい」と、手榴弾を渡されました。

それから間もなくして、いきなり私たちの壕の中に擲弾筒が打ち込まれてきました。それで気絶してしまつたのです。どれくらい気を失っていたか、気がついてみんなの名前を呼ぶと、全員無事のようにです。そんなところ

へ、吉本のおばあさんが孫を連れて来られ、「みんなも一緒だったけれど、弾にやられて死んでしまつた。私たちが助けてちょうだい。この子に水を飲ませて」とせがまれましたが、どうすることもできずにいました。

このままでは私たちも心細く、本部の壕へ行こうとしましたら、本部の壕の隊長にはピーヤ(朝鮮人慰安婦)が付いているから具合が悪いでしょうということでした。

自決が未遂に終わる

三月二六日朝、「敵艦隊座間味に上陸した」と伝令がきました。そして、「女性の軍属のみなさんは、住民が裏の山に行つてますから、食糧の持てるだけのものは持つて、移つてください。部隊長の命令です」と言われ、出ていくことにしました。けがをした兵隊たちには、それぞれ元気な兵隊がついておりましたので、私たち五人だけで逃げようということになったのです。

しかし、死を覚悟しておりましたので、高月山に登り、焼け残つた木のもとで首をくくつて死のうとするのです。

が、それができず、みんな「お母さん、お母さん」と大声で泣き叫んでしまいました。しばらく高月山をさまよって歩き、その後、再び下におり、タカマタのカーラにやってきました。そこにはツツジの花がいっぱい咲き誇っていました。今度はこの花の下で、兵隊さんからもらった手榴弾で自決しようということになったのです。

その頃から、いつしか合流していた防衛隊の四、五人も加わり、頭を寄せ合って円陣をつくり、手榴弾をおもいつきりたたきました。何度もたたくのですが、不発弾のようで爆発してくれません。それで死ぬのをあきらめたのですが、後で聞くとところによると、防衛隊員の一人がこの手榴弾を役に立たないからと投げ捨てたところ、爆発したとのことで、考えてみるとゾツとしました。

それからは、急に寒気がやってきて、空腹感をおぼえたため、三中隊の壕へもどり、毛布と乾パンをとってききました。しばらく、木の下にかがんでみると、米軍の上陸の模様をゆつくりながめていることができました。彼らは、最初、学校に陣地を作り、次にカンジャール山に陣地を作っているようで、上陸用戦車も上がってきました。

私たちは二日ほどタカマタで過ごし、水のある場所を求めてシンナークシのカーラに行くことにしました。その時から、ケガをした長谷川少尉殿も一緒です。そこに来て三、四日ほどたった頃でしょうか、長谷川少尉が破傷風にかかり、首がつるようだと訴えたかと思うと、今度は引きつけをおこして苦しみましたのです。それから間もなくして、「自分はもうだめだから、この日本刀で刺し殺してくれ」と、一緒にいた上等兵と伍長（それぞれ名前は忘れましたが）の二人に頼み、そして、「この娘さんたちは、ちゃんと親元へ届けてやって欲しい。私が死ぬ姿を見せないで欲しい」と言われていました。兵隊さんは持つていた拳銃で、長谷川少尉の左胸を撃ち、一発で亡くなった少尉の遺体に、私たちは泣きながら上をかぶせました。

その時、とっても不思議な現象が起きました。今まで水を豊富にたたえていた川が、急に干上がってしまったのです。信じられないことですが、長谷川少尉がなくなるのとほぼ同時くらいではなかったでしょうか。完全に水がなくなってしまったのです。これまで、乾パンは

(座間味)



米軍による高射砲陣地 (場所は慶留間か、6月24日)

もっているし、水が豊富にあるので空腹感を味わわなくてすんだのですが、これではどうしようもありません。それで、阿佐の裏のほうへ移動していったのです。

家族に会えぬまま……

米軍が上陸して、ちょうど一週間が経過していました。私たちは、あたりが真っ暗なうえ、道らしい道もないまま、手探りで雑草をかきわけかきわけ進んで行きました。たどり着いたところが阿佐ユヒナでした。そこで久し振りに住民たちと会い、喜んだのですが、それも東の間、一人の方が私たちの顔を見るなり、「あなた方はアメリカに強姦されて、二本松に吊るされていたと兵隊さんたちが言っていたけど、なのにあなた方、生きていたの？」と言われたわけです。日本兵の一人が根も葉もない噂を流していたんですね。結局、住民たちに、捕虜になったらあんな目に合うんだと脅迫の材料にしていたんですね。ほんとに腹が立ちました。

でも、みんなやつと家族と再会することができ、それ

それ親元へともどつていったのですが、私の家族は全く見当たりません。ただ、ある人が、「外兼久（私の実家）、ハンバタ小、松田の家族は、産業組合の壕に行つたかも知らんよ」と言うだけです。でも、一人ぼっちではどうすることもできません。その日、安里小の家族と一緒にマチヤンに行きましたが、食べ物に困つていたので再び引き返し、軍と一緒にしろうと思ひました。その頃かう、中山小のトヨちゃんと前翁長（マイウナガ）のスマちちゃんが一緒に、三人そろつて軍に「私たちも仲間に入れてください」と頼んだわけです。そしてチシに来て日本兵の本部詰めとなり、防衛隊や兵隊さんがさがしてきた材料で、食事の煮炊きをするようになりました。

ところがある日、いきなり弾が飛んできて、そこにいらなくなつてしまいました。大雨の中、東へ東へと進み、日が暮れかかったころ、ウハマの前神里の壕へたどり着きました。そこで焚き火をして着物をかわかしていたとき、明かりがもれたのか、擲弾筒が盛んに撃ち込まれてきたのです。今度はカーラ伝いに山のほうへ登つていきましたが、弾は相変わらずビュンビュン飛んでくる

ものの、不思議にケガひとつしませんでした。そうしてやつとナカウタキにたどり着いたのですが、そこのお宮には、ケガした部隊長が、ピーヤと一緒にいるとのことでした。家族は落盤した壕の中だった

そのうち、前翁長（マイウナガ）のスマちちゃんが足をやられたため、トヨちゃんと三人お宮の下のほうにかくれていました。四、五日はいたでしょうか。四月二十九日の天長節には、必ず友軍の応援がくるから頑張るようと、兵隊さんからおにぎりが配られました。しかし、食糧はいつまでももつはずはありません。とうとう、兵隊たちがしびれをきらし、山を降りることになりました。

私とトヨちゃんは、スマちゃんを抱いたり、おんぶしたりして、やつとユヒナに着きました。そこには、シンルールの家族とウザシチの盛久さんがいたもんですから、白旗を持つて出ようということになり、白いシーツを降参旗にして私が持ち、阿佐ユヒナから座間味に降りてきましたら、米兵に、ウカジンに連れて行かれました。

(座間味)

そこで男子と女子は分けられ、女子は阿真へ連れていかれ、男子はそのまま残されていました。投降した人たちのなかには、兵隊たちもまぎれ込み、軍服を脱いで住民のボロの着物を来て民間人に思わせようとした人もいたようですが、ピーヤたちが顔を覚えていたらしく、捕まっています。

私は阿真に行っても家族には会えないため、他のみなしごたちも一緒にウルクチで生活していましたが、次第に人間が増えたため、阿佐に移動することになり、山川のおばあさんたちとともに、阿佐での生活がはじまりました。

五月頃になり、産業組合の壕の遺体を運び出すという連絡が入りました。村民はこぞって出かけました。壕は落盤によって押しつぶされています。みんなの手で壕が掘り起こされました。悪臭が強く近寄れません。でも、中に入らないことには、遺体は引き出せません。男の方四、五人と、女は私一人だけが中に入りました。壕の中には米がいっぱい積まれ、その上に仰向けになっている人、伏せている人、各家族が一つにまとまって眠っている

るかのような様子など、様々です。私の家族は、着物の柄がらを見てすぐわかりました。母や妹など、みんなの皮膚は、いかにも水に長い間浸したように、やわらかくなっています。住民の遺体は、男の方々がビニールカバーに一人ずつくるみ、二カ所の出口からそれぞれ外に出して家族や親戚に渡しました。

私の家族、ハンバタ小、松田の家族は一つの壕に移しておき、白骨化するのを待って家族ごとにとめました。カマスに入るだけの骨を入れ、入らないのは茶毘だひに付して灰を分け、持ち帰りました。

ああ、何てむごいこと。母がユヒナのガマに行くといつたとき、どこまでも逃げるようにと言えば良かったのに……。留まるように言ったことが、このような結果になるとは……。ほんとに思い出ただけでも、胸が張り裂けそうです。

私の戦後は、親戚の家を転々とするところからスタートしたのですが、完全にひとりぼっちになった辛さ、悲しみは、自分一人でたくさんです。これ以上、だれにも味わってほしくありません。まして、これがあの無意味

な戦争のせいだったと考えると、何の罪もないのに亡くなった人たちがあまりにもかわいそうです。今後、絶対に戦争の起こらない平和な世の中をつくるよう、これらの若い人たちに頑張ってもらいたいと思います。

米軍と住民のパイプ役

——戦時下の父・繁信を語る——

知念 繁夫

(知念 当時十五歳)

那覇での十・十空襲

昭和十九年七月七日のサイパン玉砕のニュースに接した時、我が家は悲嘆の重苦しい空気に包まれていた。繁兄夫妻が、学校教員として、二年前にサイパンに渡っており、その安否を気づかっていたからだ。それから数日後、政府外務省の係官二人がやってきて、正式に繁兄夫

妻の死亡通知書を父に渡した。小さな机を白い布で覆い、仮の祭壇を急造し、位牌を立て、線香を捧げた。線香の煙が立ち込める我が家は、朝から夜まで、連日母の泣き声や恨みがましい独り言が絶えることがなかった。父が泣く姿もはじめてみた。

ところで、やがて気を取り直した母は、長男夫妻が死んでしまったということにはどうしても納得が行かず、その頃からユタ・サンジンソウ(三世相・易者)に通うようになった。その結果、「死んでない人をどうして申う必要があるか」と、母は祭壇を取っ払い、位牌も人目のつかぬ所へ片づけてしまった。ところが、このことが、父と母のいさかいの種となってしまったのである。父としては、母のいうユタのお告げと、また、「軍人でないのに死ぬはずがない」という言い分に対して、「軍人でなくとも、国威昂揚に尽力した教員である。生きて虜囚の辱めを受けず」の精神を持っている日本人だ。最早、生きているはずがない」ということだった。

しかし、封建的で、典型的な亭主閥白の父も、我が子を想う妻の狂気にも似た仕草と剣幕に対しては取りつく

座間味村関係略年譜

年号	座間味村関係記事	
一二六一年 (景定・中統二)	古座間味貝塚、ウタハ貝塚は貝塚時代前期(今から三、五〇〇年前)の遺跡とみなされている。	英祖、各地を巡り田畑の境界をただす。(「球陽」)
一二六四年 (至元一)	久米、慶良間、伊平屋の各島はじめて中山に入貢。 (「球陽」)	明の太祖・楊載を遣わし招諭する。中山王察度進貢する。(「球陽」)
一三七二年 (洪武五)		中山王(尚巴志)三山を統一。(「球陽」)
一四二九年 (宣徳四)		市舶司が泉州から福州に移り、柔遠駅(琉球館)が設けられる。(「沖縄大百科事典」)
一四六九年 (成化五)		室町幕府、島津氏に琉球渡航の取り締りを命ずる。 (「沖縄大百科事典」)
一四七一年 (成化七)	慶良間諸島が「計羅婆島即百島」と表記される。 (「琉球諸國紀」)	

☆一九四六年(昭和二一)以降は、上巻2-2「戦後の歩み」参照。

<p>一九四四年 (昭和十九)</p>	<p>慶良鋳業所(屋嘉比)の精鋳運搬船全滅(10・10)。 座間味、阿嘉に各七人ずつの朝鮮人「従軍慰安婦」が送られてくる。 阿嘉の十七歳〜十九歳の男子、戦闘教練に参加させられる(12月)。</p>	
<p>一九四五年 (昭和二〇)</p>	<p>座間味島の十六歳から四五歳までの男性たちが防衛隊として再編成される。また女子青年約二〇人も軍属として徴用される(1・3)。 午前八時頃より米軍機突然姿を現わし座間味阿嘉港内碇泊の船と慶良間海峡に停泊中の船団、空襲により十数隻炎上沈没する(1・21)。 座間味国民学校の「御真影」を疎開(1月)。 座間味、阿嘉の基地主力大隊約一、三〇〇人が沖縄本島へ移動(2・18)。 阿嘉の朝鮮人「従軍慰安婦」も基地隊と共に移動して行く(2・18)。 朝鮮人軍夫約六五〇人(座間味三〇〇人、阿嘉三五〇人)配置される(2月)。 阿嘉、屋嘉比の満十七歳以上四五歳までの男性たちが防衛隊として召集される(3月)。</p>	<p>米艦載機、奄美、沖縄、宮古、八重山を空襲(1・3)。 米艦載機、南西諸島全域を空襲(1・12)。 米機動部隊、台湾と南西諸島を攻撃(1・21)。 第二次現地防衛召集(満十七〜四五歳までの男子)を実施(1月)。 県庁平時行政から戦時行政に切り換える(2・7)。 第三二軍、戦闘指針(一機一艦船、一艇一船、一人十殺一戦車)を軍民に示達(2・15)。 市町村単位に国土防衛義勇隊を編成する(2・15)。 県下男女中等学校単位の防衛隊結成(2・19)。 児童や一般老幼婦女子の県外への疎開が打ち切られる(3・5)。</p>

〔編集経過と本書の成り立ち〕

(1) 編集経過

一九七五年（昭和五〇）

田中登村長より知念繁に村史編集への協力要請あり。翌年構想試案を作成。

一九七七年（昭和五二）

10月17日 第一回編集委員会開催。委員五人。委員長に知念繁、副委員長に山城安市。その後、新たに五人の委員を任命（委員氏名は後述）。

一九七九年（昭和五四）

3月28日 事務局長に宮城武彦任命。

一九八〇年（昭和五五）

8月21日 古座間味貝塚発掘現場の視察。

一九八一年（昭和五六）

8月7日 高宮廣衛による考古学についての講演会開催。

一九八二年（昭和五七）

5月17日 知念繁、国立国会図書館で資料調査。

10月9日 “地域史まつり”に出席。これからの親しみやすい村史づくりについての認識を深める。

一九八三年（昭和五八）

4月16日 編集委員会で、事務局体制の強化についての話し合い。

一九八四年（昭和五九）

2月15日 編集委員会。各担当項目の進捗状況について。

4月4日 第二次編集計画を策定。発行を座間味小学校百年記念式典に間に合わせ予定。

8月1日 各委員の原稿×切日を8月31日とする。

12月22日 那覇市泊定期協会で編集委員会。

一九八五年（昭和三〇）

4月22日 提出原稿のまとめについての検討。

7月5日 原稿の提出状況について話し合い。

10月22日 新たに編集事務局を開設することに決定。

12月20日 豊見城村に「座間味村史編集事務局」発足。事務局員に宮城晴美、赤嶺治夫、高江潮敏子採用。

一九八六年（昭和六一）

1月1日 編集ニュース発行、以降五号まで継続。

3月4日 原稿の点検基準を作成。

4月9日 補足調査取材に着手。

一九八七年（昭和六二）

4月20日 泊港北岸近くに事務局移転。

一九八八年（昭和六三）

1月19日 入札説明会。

3月17日 原稿の出稿開始。

10月5日 初校開始。

一九八九年(平成元)

2月20日 再校着手。

5月30日 四校校了。

7月10日 『座間味村史』(全三巻) 刊行。

(2) 編集基本方針

『座間味村史』(全三巻)の編集にあたっては、あらかじめ次のような基本方針を策定し、それにもとづき調査、執筆が行われた。

1 県内外における座間味村に関する資(史)料を最大限に調査収集し、古代から現代に至るまでの座間味村の歴史を具象的、総合的に記述する。

2 各時代における村民の暮らしのありようが生き生きと浮きぼりにされるように心がける。そのためにも口碑、伝承、聞き書きを効果的に利用し、単なる史料の羅列に終わらないようにする。

3 国、県、隣接市町村との関連、比較が有機的に把握できるようにするとともに、歴史上の意義が簡明に理解できる

ようにする(ただし、沖縄史特有なものについての記述は必要限度にとどめる)。

4 各分野ともに、可能な限り座間味村の特色をはっきり打ち出すよう心がける。

5 記述は、一般村民、中高生にも理解できるように平易な文章にする。

6 全体の構成・章立ては、編集基本方針に基づいて読みやすく、バランスのとれたものにする。

7 必要に応じて、図・表・グラフ・写真などを採用し、読みやすく理解しやすいようにする。

(3) 編集委員

原稿の作成にあたっては、以下に紹介する編集委員諸氏より各字ごとの諸資料を提出していただき、編集委員会で検討を加え、それらをもとに内容の深化と具体化が図られた。

編集委員長 知念 繁(座間味)

編集副委員長 山城 安市(座間味)

編集委員 石川 重徳(座間味・阿佐)

〃 宮里 勇清(座間味)

〃 与那嶺 清(阿佐)

〃 島袋栄次郎(阿佐)

編集委員 大村 太郎 (阿真)

〃 垣花 武栄 (阿嘉)

〃 金城 信盛 (阿嘉)

〃 照喜名定盛 (阿嘉)

〃 野崎 真助 (慶留間)

事務局 宮城 晴美 (編集)

〃 赤嶺 治夫 (編集)

〃 高江洲敦子 (庶務)

〃 山内 悦子 (庶務)

(4) 執筆分担

執筆にあたっては、各編集委員によつて提出された資料を原稿整理の過程で移動、分散、統合、補足の必要にせまうれたため、結果的にはほぼ全編集委員の資料、原稿が各編に網羅される形になっている。本来ならば執筆分担の枠はもつと明確にされるべきであろうが、『座間味村史』の性格上、それは困難をともなうものであった。そこで各編を担当された方々を「おもな執筆者」として紹介し、読者の便宜を図るとともに寄稿いただいた諸先生方に感謝の意を表したい。

序 説 座間味村の概観 (上巻)

知念繁、赤嶺治夫

第一編 自然 (上巻)

天野鉄夫 (植物)、大城逸朗 (地形と地質)、知念繁 (動物)、

赤嶺治夫 (その他)

第二編 歴史 (上巻)

知念繁 (先史・琉球王国時代)、与那嶺清 (産業組合)、山

城安市 (戦後の歩み)、山城安次郎 (戦後の復興)、知念繁

夫 (慶良間列島制)、赤嶺治夫 (和久田墓徳)、宮城晴美 (浦

足および、その他)

第三編 産業 (上巻)

上田不二夫 (養漁業)、宮城武彦 (農業一部)、山城安市 (農

業・畜産・統計)、宮里光祿 (鉱業)、野崎真助 (養蚕)、赤

嶺治夫 (浦足およびその他)

第四編 教育・文化 (中巻)

照喜名定盛、野崎真助、山城安市 (以上教育関係資料)、宮

城晴美 (学校教育・社会教育)、赤嶺治夫 (文化)

第五編 社会 (中巻)

宮里清五郎 (海上交通)、与那嶺清 (医療)、山城安市 (各

種事業・社会福祉)、宮城晴美 (その他補足)

第六編 民俗 (中巻)

名嘉真宜勝 (葬墓制)、名嘉順一 (言語)、与那嶺清、垣花

武栄 (以上種子取り行事)、宮里勇清、大村太郎、金城信盛

(以上行事と信仰、地名)、高江洲敦子 (出産・婚姻)、宮

里清五郎（氣象・海象）、知念繁（衣食住・行事と信仰・古謡・他）、赤嶺治夫（補足およびその他）

第七編 戦争体験記（下巻）

原稿提出者および証言者氏名略、宮城晴美（まとめ）。

第八編 資料編（下巻）

富島壮英（座間味村郷土史資料紹介）、井上秀雄（石川家蔵古文書読み下し文）、石川重徳（資料提出）、山城安市（年譜）、知念繁（仲尾次政隆翁日誌・新聞記事）、宮城晴美、赤嶺治夫（まとめ）

索引（下巻）

宮城晴美、赤嶺治夫、山内悦子

(5) 写真・図版、その他協力者氏名

村史の編集にあたっては、多くの村民はじめ各関係機関の方々から多くのアドバイスを受け、写真・図版、資料等の提供をいただいた。以下、お名前を列挙しお礼を申し上げます。

〔機関〕（順不同）

沖縄タイムス社「沖縄大百科事典」、琉球新報社、第十一管区海上保安本部、沖縄氣象台、沖縄県生活福祉部援護課、県教育庁文化課、那覇市文化振興課、沖縄県立図書館、沖縄県立博物館、防衛庁防衛研究所戦史室、沖縄県立平和祈念資料館、

沖縄総合事務局運輸部、大宜味村、沖縄国際大学高宮研究室、豊見城高校図書館、(株)電通沖縄支社、那覇出版社、ラサ工業株式会社、琉球エアークommunicator、慶良間海洋文化館、月刊沖縄社

〔村外関係者〕（順不同）

新垣源勇（元阿嘉小中学校教頭）、河村望（東京都立大学教授）、木崎甲子郎（琉球大学教授）、岸本義彦（県教育庁文化課）、金城正篤（琉球大学教授）、興石豊伸（注釈「岡山游草」著者）、新城栄徳（「琉文手帖」主宰）、馬上誠光（元阿嘉小中学校教頭）、外間守善（法政大学教授）、花城卓起、米盛重保

〔村関係者〕（順不同）

安里政芳、大城喜正、大城晃、垣花武信、金城英盛、金城国雄、新城春子、成島正二、松本忠司、宮川恒子、宮城恒彦、宮里清五郎、宮里芳和、宮田良三、宮平久米男、宮平重春、宮平妙、宮平秀昭、宮平秀保、宮平秀幸、宮平安弘、宮村幸延、宮村幸文、与儀幸子、伊計徳善、宮平達彦

なお、取材協力者も明記しなければならぬが、膨大な数にのぼるため割愛せざるを得なかった。ここでお詫び申し上げますとともに、心から感謝の意を表します。

◆各巻の収録内容◆

『座間味村史』（全3巻）

上巻 (本文710ページ)	中巻 (本文658ページ)	下巻 (本文640ページ)
<p>序説</p> <p>第1編 自然</p> <p>1. 地形と地質</p> <p>2. 海洋</p> <p>3. 気象</p> <p>4. 植物</p> <p>5. 動物</p> <p>第2編 歴史</p> <p>1. 先史時代</p> <p>2. 琉球王国時代</p> <p>3. 明治・大正期</p> <p>4. 昭和・戦前期</p> <p>5. 戦場下の座間味村</p> <p>6. 慶良間列島制施行</p> <p>7. 戦後の歩み</p> <p>第3編 産業</p> <p>1. 水産業</p> <p>2. 農業・畜産</p> <p>3. 林業</p> <p>4. 鉱業</p> <p>5. 養蚕業</p> <p>6. 観光事業</p>	<p>第4編 教育・文化</p> <p>1. 学校教育</p> <p>2. 社会教育</p> <p>3. 文化</p> <p>第5編 社会</p> <p>1. 交通・通信</p> <p>2. 各種事業</p> <p>3. 医療衛生</p> <p>4. 社会福祉</p> <p>第6編 民俗</p> <p>1. 衣食住</p> <p>2. 人生儀礼</p> <p>3. 行事と信仰</p> <p>4. 古謡・歌謡・童戯</p> <p>5. 言語伝承</p> <p>6. 民俗知識 (付、方言地名地図)</p> <p>7. 各字の概況 (付、字別屋号地図)</p>	<p>第7編 村民の戦争体験記</p> <p>1. 村内の戦争体験 (26人の証言)</p> <p>2. 村外の戦争体験 (3人の証言)</p> <p>第8編 資料編</p> <p>1. 文献資料 総記／自然／考古 ／前近代／近代 ／産業／民俗／由来 記類／村内資料 ／村行政資料</p> <p>2. 新聞記事</p> <p>3. 統計資料</p> <p>4. 略年譜 (～1945)</p> <p>5. 索引</p> <p>.....</p> <p>カラー口絵 123点</p> <p>写真 537点</p> <p>図版 120点</p> <p>表 140点</p> <p>コラム 58点</p>



The history of Zamami village
printed in Okinawa

座間味村史 下卷

一九八九年七月十日 初版発行

編集 座間味村史編集委員会

発行所 座間味村役場

〒901 34 沖縄県座間味村字座間味二〇九番地
電話 (〇九八九八七) 二二二一(代)

発行人 宮里 正太郎

印刷 文進印刷株式会社

〒902 沖縄県那覇市上間五六七番地
電話 〇九八八(五五)二二三三(代)